

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成3年4月9日から平成4年3月31日まで実施した。
3. 調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林茂吉
社会教育課長	吉田和子
町史・文化財係長	岩崎保夫
町史・文化財係	坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
発掘調査担当者	坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
4. 本書の執筆は調査担当者があたり、文末に記した。
遺構図版作成は小林登喜江、石器実測図版作成は鍋島直久、土器拓影図作成には整理作業参加者全員の協力を得た。また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関により御指導、ご協力を賜った。
浅野晴樹、荒井幹夫、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、田代治、谷井彪、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）
埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町遺跡調査会、大井町立郷土資料館。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
〈発掘調査参加者〉（敬称略）
会沢泉、浅野昭夫、新井和枝、飯塚泰子、石川与一、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曾根キク子、遠田つる、笠原英子、金子君子、神木光治、小林こずい、小山エミ子、佐久間ひろ子、佐藤至一、佐藤智子、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、戸澤竹二、中嶋末子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、山内栄美子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
〈整理作業参加者〉（敬称略）
石垣ゆき子、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、中野和子。

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑 $\frac{1}{60}$ ・炉 $\frac{1}{30}$ ・石器実測図 $\frac{1}{4}$ ・土器拓影図 $\frac{1}{3}$ とした。
2. 遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
小礫；2.0mm以上、粗砂；0.2～2mm、細砂0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表している。

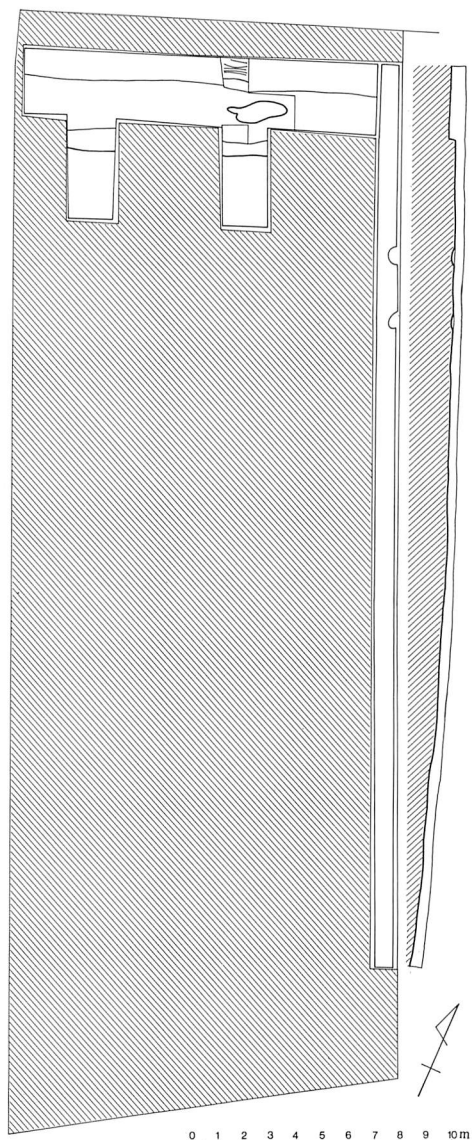
VI-2 苗間東久保遺跡第17地点

(1) 調査の経過と概要

調査区は遺跡の南側、東流する浄禅寺川の北側斜面に立地している。1991年2月1日、現状の畑地を駐車場にすると申請があった。造成は現状面上へさらに盛土を行い、遺跡には影響をおよぼさないため、全面発掘は行わなかったが、駐車場を囲う塀及び道路後退部分については、ローム面まで掘削するため調査をした。なお、本調査区の西側を14・15地点として調査した際には、ピット、土坑が多数検出され、称名寺式の土器を伴う土坑もあった。

1991年3月12日、塀及び道路後退部分の表土はぎを人力により行い、遺構確認を行った。道路後退部分は根切り溝及び耕作により、ローム層まで全面的に掘削されていた。しかし耕作土中に遺構覆土らしき褐色土ブロックが混じっていたため、根切り溝の覆土を除去した結果、一部に遺構覆土を確認した。調査した結果、非常に浅い遺構で、覆土は焼土を少量含む褐色土であった。上部を破壊された土坑の底面の可能性もある。遺構規模は195×75cm、最深部でも10cmしかない。

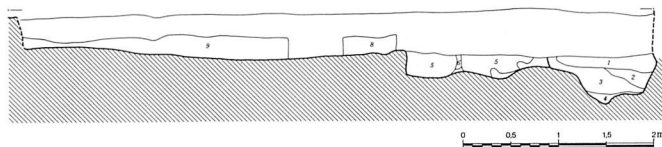
ブロック塀建築予定地には幅1mのトレンチを調査区南端まで入れた。調査区の北東部分で浅いピットが2カ所で検出されたが、時期等は不明である。地山のロームは、さかい川に向かって下るにつれ次第に黒くなっていき、最後には低地特有の黒色土に変化する。3月15日調査を終了した。(高崎直成)



第35図 苗間東久保遺跡第17地点調査区域図 (1/300)



土坑
1層 褐色土 硬くしまる
焼土粒少量含

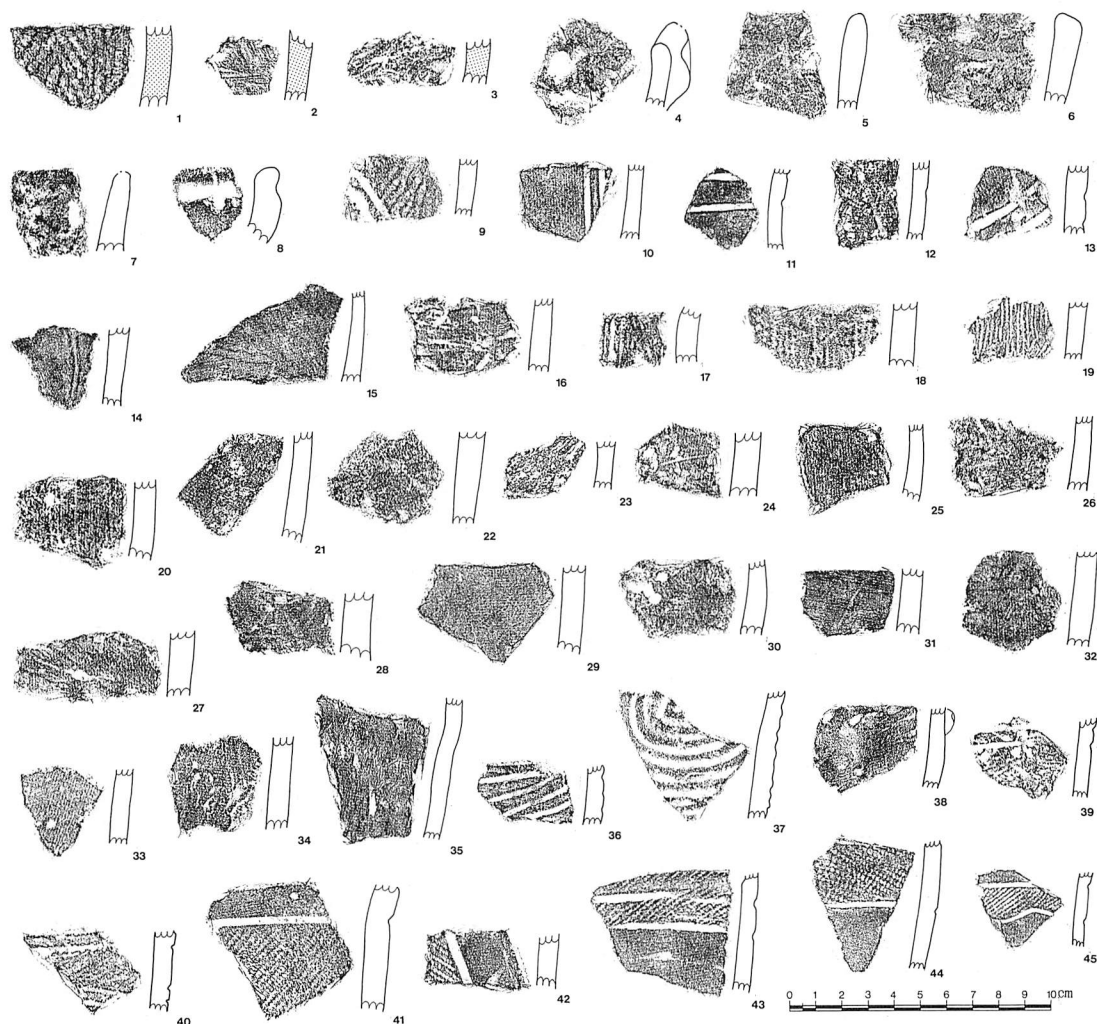


根切り溝
1層 黒色土 脆い ロームブロック(大)少量
2層 暗褐色土 脆い ロームブロック(小)少量
3層 褐色土 脆い ロームブロック・ローム粒子多量
4層 暗褐色土 脆い ローム粒子多量
5層 暗褐色土 脆い 土坑1の褐色土ブロック含

第36図 苗間東久保遺跡第17地点土層図 (1/60)

(2) 出土遺物 (第37図)

1は羽状縄文をもつ焼成良好で明褐色を呈する。2は条痕でなく擦痕をもち、3は繊維圧痕が残る。1～3は胎土に植物繊維を含み3は特に多量である。24・30は無文であるが胎土は同様である。4～8は中期後半の口縁部片であり、9は渦巻文と区画文の1部を残す。8は口唇下に沈線がめぐる。9は地文縄文に2本組の沈線を配する。16～17は擦痕状の条線をもち、18～20は条線文の胴部片。21～34は無文の胴部片であるが厚手と薄手(33～35)があり、後者は後期の可能性が大きい。36・37は棒状工具による沈線を重ね回転施文した中部高地系のもの。38は刺突文を伴う低隆帯をもつ口唇下部片で器厚は4～5mm。41～45は地文に細縄文をもち磨消しを伴う類である。43～45は横位沈線で地文を画し丁寧に磨消し、器内面にも研磨調整を加えている。焼成良好で暗～黒褐色を呈する。35は加曾利B 1式精製土器の典型例である。1～3など縄文前期片、37など後期堀之内期、43～45など加曾利B期を含むことが注目される。



第37図 苗間東久保遺跡第17地点遺構外出土土器 ($\frac{1}{3}$)

中沢前遺跡



調査前全景



トレンチ全景

浄禅寺遺跡第5・第6地点



調査区全景



調査風景



トレンチ全景

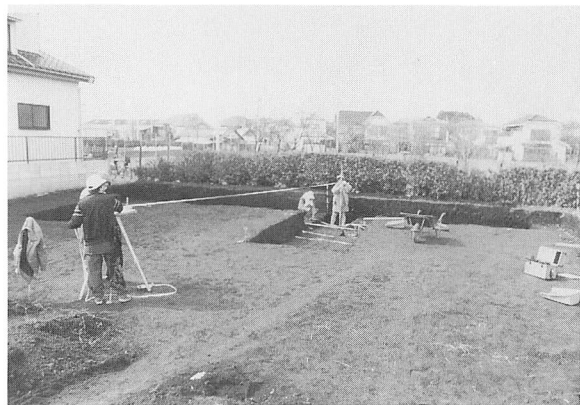


第5地点 土坑

苗間東久保第17地点



調査前風景



調査風景